

赤司様が洛山への進学  
を止めたそうです。

くろめがね

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

帝光中学校にいるその少年。

奇跡の世代と同世代に生まれてしまったせいで、いちども目の見ることのなかった彼だったが、そんな彼が唯一無二の己の力を用いて、物語を大きく狂わせる。

# 目次

赤司様が洛山への進学を止めたそうです。

---

1



# 赤司様が洛山への進学を止めたそうです。

帝光中学校、バスケットボール部。

部員数は百を超え、全中三連覇を誇る超強豪校。

その輝かしい歴史の中でも、特に最強と呼ばれ無敗を誇った、十年に一人の天才が五人同時にいた世代は、奇跡の世代と言われている。

そして彼は、そんな奇跡の世代と同世代の人間だった。

彼ははつきり言つて非常に影の薄い人間である。

影が薄いというよりは、キャラが薄いというべきか。

どういふことかと言われれば、彼はバスケット部員でありながら、公式、非公式を問わず、バスケットの試合に出場した回数が極端に少ないのだ。

それは、彼がバスケットが下手だからではない。むしろ彼は、とてもバスケットが上手い。ただ単に、奇跡の世代には敵わなかったというだけの話である。

毎回ベンチ入りしているのに試合には出られない。

決して試合には出られないのに、毎回ベンチ入りだけは果たす。

そんな彼についたあだ名は、ベンチの番人。

とても報われない話である。

脇役であり、端役であり、影にすらなれない完全なるモブ。彼はそんな人間だった。

しかし、そんな彼は、ある意味でとてつもない人材であった。

奇跡の世代と呼ばれる天才五人が、それぞれ己と他者を隔絶させる武器を持っていたように、彼も一つの特異な力を持っていた。

それが故に彼は、天才五人のうちの四人からは絶大な支持と尊敬を受け、そして残った一人からは殺意と苦手意識を持たれていた。

そんな彼の持つ能力。

それは、当時帝光中学校バスケットボール部において、絶対王政の恐怖政治を敷いていた主将赤司征十郎に対し、唯一、面と向かってズバズバと好き放題に物を言うことのできる能力だ。

理不尽なことを言われた場合には『ふざけんなー』と怒鳴り、殺人的すぎる練習メニューに対して『ふざけんなー』と怒鳴る。

「逆らうものは親でも殺す」を地で行く赤司勢十郎に対して、こんな無謀な発言ができたのは、後にも先にも、彼だけであつただろう。

そして、そんな彼と赤司征十郎の、とある日の会話から、物語は動き出す。

「……そういえばさあ、赤司さん、どこの高校いくの?」

彼がそれを聞いたのは、単に好奇心からだった。

赤司がどこの高校に進学しようが、どうせ自分が日の目を見ることはないと思っ  
ている。

この三年間、奇跡の世代を間近で見てきた彼は、完全にバスケットに対して卑屈になっ  
ていた。

高校に行ってもバスケットを続けるつもりではあるが、その場合の目標はと言えば、『楽し  
くバスケットをすること』などという平凡すぎるものだったりする。

ここで『キセキに勝つ!』とでもいったような気概を見せられれば、彼も主要キャラ  
になれるのだろうか、そこはそれ。彼は骨の髄までモブだつた。

「ん?俺は……そうだな。洛山高校に行こうと思つている。推薦をもらったからね」

「洛山?」

赤司の答えに彼は顔を顰める。

そしてしばしの沈黙の後、彼は大きくため息をつくのだった。

「洛山……洛山ねえ……」

「ん?どうした?」

どこか様子のおかしい彼に対して赤司は怪訝な視線を向ける。

「いや……、洛山って、あれだよね。なんか俺らの一つ上の世代のステェ人たちが……無冠の五将つつたつつけ？　が、三人も入ってた所じゃなかったつけ？」

「ああ。よく知ってるな。俺も推薦をもらってから調べてみたんだが、どうもそれなりに使える奴が三人、洛山にいるらしい」

「……失望したよ、赤司さん」

「な……なに？」

いきなりの彼の発言に、赤司は若干惑ってしまふ。

そんな強豪校から推薦を貰えたという事実はむしろすごいことであるはずなのに、彼が一体何に失望したのか、赤司には分からなかった。

「……どういふことだ」

戸惑いながらも問い詰める赤司に対し、彼はため息を一つついてから語りだした。

「いや、だってさ、赤司さん。あんたいつも『自分が勝つことは当然のことである』みたいなこと言ってるじゃん？　そんなあんたがさ、洛山みたいな勝って当然みたいな高校に行つていいのかよ？」

「……何がしたい」

「だって考えてみるよ。無冠の五将が三人と、奇跡の世代が一人いるチームで、どうやって負けるっつーの？　赤司さんが洛山に入って、そこでその年のIHで優勝したとして？」



はい。それでなに？って感じだよ」

「……………」

「最初から勝ちに行くなんてダメだろ！勝って当然みたいなところに入って、案の定勝って、それで「勝つことは生きていくうえで当たり前前の基礎代謝のようなもの」なんてドヤ顔されても、ああ、そう。としか思えねえよ」

「…………俺がいつドヤ顔をした…………」

「割といつでもしてるっつーの。まあアホ峰程じゃないけどさ」

「……………」

そろそろ赤司にも怒りが溜まってきたようで、無言の中でもその瞳には凄まじいまでの殺意が宿っているのだが、そんなものに怯む彼ではない。

そもそもこの程度の殺意。彼は既に受けなれている。

「まあ、とにかく。例えば赤司さんがさ、まったく無名の高校に行って、そこですらも勝ち続けてしまうってんなら、俺も赤司さんスゲエぜって思うよ？でもさ、最初から勝ちにいつといて、『勝つことは当然』なんて言われてもねえ……。一生懸命考えた計画が上手くいってよかったでちゅねー、ってくらいな感想しか抱けねってなもんさ」

「……………」

黙り込む赤司と、言い切った感で溢れる彼。

イラついた表情の赤司と、さっぱりした様子の彼。

まったく異なる様子の二人が紡ぐ沈黙がしばし続き――

「……………いいだろう」

――唐突に赤司が言葉を発した。

「ん？赤司さん？なんて？」

首を傾げる彼に、赤司は挑戦的な瞳を向ける。

「いいだろうと、と言った。お前の挑発を受けてやる。洛山の推薦は辞退して、どこか無名の高校に進学するでしょう」

「……………へ？」

「とはいっても……………、部員にまったくやる気のないような弱小校では話にならないからな。せめてインターハイ予選の準決勝位には出られるような学校にさせてもらうが、まあそれくらいはいいだろう」

「あ、あの、赤司さん？」

「見ているがいい。俺が洛山でなくても勝てるということを見せてやる」

「……………」

彼は黙り込むしかなかった。

半ば冗談で言ったことだったのに、赤司が推薦を蹴るなどという事態になってしまっ

た。

しかしこれは奇跡的な瞬間でもあった。

余りにもモブな彼が。

ここに至つてなお、名前すら出してもらえないほどのモブである彼が。

赤司征十郎という、世界の主演と言つてしまつても良いような存在の人生を動かしたのだ。

これは本当に、奇跡的な瞬間で、この奇跡がこの後、大きな波乱を呼ぶことになる。

「そうだな……黄瀬は海常、青峰は桐皇、緑間は秀徳、紫原は陽泉だったな……。それ以外で……無名で……尚且つ、それなりに部員にやる気のある学校か……。……そういえば今年のI Hで、東京予選の決勝リーグまで残つておきながら、リーグ戦全てでトリプルスコアで負けた新設校があつたな……。ふつ、ちょうど良いじゃないか」

そうして赤司が選んだ進学先で、赤司にとって予想外の再会が待っているのは、また別の話である。